

二階は静かだった。直哉は持つてきたミニカーを走らせて遊びだし、栄子は乾燥機に洗濯物を入れてスイツチを押した。そして、廊下を挟んで並んでいる六個のドアに目を移した。

管理人だから一応のことは知っていたほうがいいと言つて、源造は住人のことをいろいろ教えてくれた。それによると、平日のこの時間に部屋に居るのは十号室の松本百合と十五号室の矢島志津である。

松本百合は二十七歳のイラストレーターで、百合の描くキャラクターが子供たちに人気を得て、テレビのコマーシャルにも使われている。クルクルピーという猫の子の仕草が可愛くて、そのコマ

ーシャルが流れると直哉もいっしょになって踊ったり歌ったりしている。

原稿の締め切りに追われているのか一日中部屋に閉じこもっていて、廊下や玄関で顔を合わすこともほとんどない。今も十号室の中から物音一つ聞こえないから、徹夜明けの仮眠を取っているのかもしれない。挨拶に行つたときに見た百合の青白く透き通つたような肌と窪んだ目。その目の周りにはうっすらと隈ができていた。流行のイラストレーターという職業も決して楽な職業ではないということがその顔色に現れていた。

隣の十一号室は大学生の田口三枝子が

同居人の牧原健二と住んでいる。二人で住んでいるために家賃が他より高くなっている。

「同居人って、田口さんの親戚の人なんですか。

それとも、婚約者かしら」

源造からそのことを聞いたとき、同居人という意味が分からなくて聞き返した。

「それがね、今は恋人だけど結婚するかどうかは分からないって言っていたよ。それでも二人そろつて挨拶にきたし、家賃の値上げも快く承諾したから同居を認めただ」

「結婚するかどうか分からないのにいっしょに暮らしているんですか」

栄子は思わず咎めるような口調で答えていた。

若者の間で家賃を節約するための同棲が流行しているのは知っている。しかし、今まで身近にそういう人達を見たことはなかった。雑誌や週刊誌で読んだだけの時代の先端を生きる男女に、この古いあかつき荘で出会ったことが意外だった。

牧原健二は、夕方部屋を出て帰ってくるのは夜中の三時近くである。吉祥寺の駅近くにあるスナックのバーテンということだった。三枝子は普通の大学生で、後一年で卒業して故郷で英語の教師になるという。頬のあたりで切り揃えた髪と黒縁のメガネが高校時代にガリ勉で知られていたクラスメートに似ている。どこか崩れた感じ

のする健二と生真面目そんな三枝子の組み合わせに違和感がある。しかし、休日に二人で寄り添って出かける姿を見ると、似合いのカップルに思えてくるから不思議でたまらない。

矢島志津は吉祥寺に何軒も店をもっている女実業家である。あかつき荘に二十年も住んでいるとかで、栄子を初めて紹介したときの源造の口調は随分親しかった。

「今度姪の村木栄子が管理人として住み込むことになった。まだ世間を知らない弱輩者だから、いろいろ教えてやってもらいたい。管理人の面倒を見るというのおかしな話だけど、よろしく頼むよ」

「私のほうがお世話になるんですよ。教えることなんか何もありませんよ」

頭を下げる栄子を見て、志津は戸惑っているようだった。

「いやいや、おまえさんはこのあかつき荘の主みたいなものじゃないか。だから頼んでいるんだよ」

源造にそこまで言われて、志津はうなづいた。

「栄子さん、仲良くしましょうね。困ったことや分からないことがあったら何でもいつてきてね」

栄子を見る目が優しくなった。

志津は毎日夕方になると美容院へ出かけ、長い髪をふつくらとしたアップにまとめてくる。そして、八時を過ぎると和服に着替えて店へ出ていく。

その姿はお花かお茶のお師匠さんといった感じで、とてもスナックのママには見えなかった。

その志津にあかつき荘の古い建物も不釣り合いだった。深い門構えの屋敷か、高級マンションがピッタリである。店に近いというだけの理由でここに二十年も住んでいるのは納得がいかなかった。いつかもつと親しくなったら、本当の理由を聞いてみようと思っていた。

栄子がボンヤリと志津の部屋を眺めていると、突然十三号室のドアが開いて上田洋子が出てきた。栄子の顔を見て驚いたようだったが、それでも笑顔で近寄ってきた。

「こんにちは、二階に上がって来るなんて珍しいですね」

「乾燥機を使っていたんです。うるさかったですから」

「いいえ、ちつとも。この雨ですもの、子供さんがいると洗濯物が大変でしょう」

洋子は外出着を着ていた。ショートカットの髪に大き目のゴールドのイヤリングがよく似合っている。

「今日はお仕事、お休みですか」

「無理に休みを取ったんです。どうしても観たい映画があったから」

「いいですね。好きなときに映画が観に行けるな

んて。私はもう何年も映画館に行ったことがないんですよ。学生のときは週に一回は行っていたのに」

「映画だけが趣味なんです」

栄子もつと話を続けようとしたとき、洋子は腕時計に目をやった。そして、ごめんなさい、急ぎますからといい残して階段を駆け降りていった。まるで恋人に会いにいくような弾んだ足取りだった。

上田洋子は三十半ばで独身である。吉祥寺で一番大きい書店に務めている。

源造は洋子のことを「ちよつと変わった女」と言っていた。もう五年近くも住んでいるのに

洋子がまだ独身だということも不思議だとは思わない。栄子の友達にもまだ独身者がいる。大学を出てからコンピューターの専門学校に通い、今は大手企業に就職して男顔負けの仕事をしている。栄子とはかけ離れた世界ではあるが、彼女の生き生きした姿を見ると、女が仕事に生きるのも一つのりっぱな生き方だと思えてくる。

洋子も結婚より仕事と趣味に生きる生活を選んだだけのことだ。経済的に自立しているのだから周りでもやかく言うことはない。もっと親しくなったら、洋子の生き方を応援してあげられるのにと残念だった。

一度も客が部屋を訪れたことがなく、この住人の誰とも親しくしないということだった。休日 は一日中 部屋に閉じこもってラジオを聞いている。ラジオに合わせて大声で歌を歌うこともあるとか。あれでは結婚も難しいだろうねと源造は言っていた。

しかし、栄子は洋子を変人だとは思っていない。部屋に閉じこもっているわけは、先日洋子の部屋を一目見たときに分かった。壁面いっぱい並べられている単行本が目に入ったからである。本が好きだから書店に勤めているのか、書店に勤めているから本が好きになったのか分からないが、洋子が相当の読書家であることは確かだった。

仕事と言えば、このあかつき荘に住んでいる人は達 はみんな何らかの仕事をもっている。忙しい人ばかりでまだ一度も顔を見たことがない人もある。

十二号室は文具機器を扱う会社の社宅になっていて独身の男性が二人住んでいるが、長期出張 が多くてほとんど部屋に帰ってこない。一番奥の十六号室の夫婦も忙しい人達だった。共働きで、二人いっしょに早朝に部屋を出て帰ってくるのはいつも夜中である。休日 も部屋にいたことはないし、部屋で食事を作っているようすはまったくない。それでも夫婦と言えるのだろうか、栄子はなかなば呆れていた。

乾燥機が鈍い音をたてて止まった。これで  
一回分の洗濯物が乾いたことと、洋子と少しでも  
言葉を交わしたことで栄子の苛立っていた気持ち  
が少し治まってきた。

雨もどうやら小降りになってきたようである。

これなら直哉を連れて買い物に出かけられそう  
だ。今度は急に空になった冷蔵庫のことが気にな  
って来た。

「直哉、買い物に行こうか」

手招きをすると、直哉も嬉しそうに駆け寄って  
きた。

あかつき荘は月末の三日で家賃を集めること  
になっている。栄子はそれを翌月の二日に源造の

家へ届ける。銀行振込みにしてもいいと言われて  
いるが、栄子にそのつもりはない。月に一度の

訪問を源造夫婦が待ち詫びていることを知って  
いるからだった。

源造は栄子の管理人としての報告や世間話を  
楽しそうに聞く。その間、直哉は芙美といっしょ

に庭に出て遊んでいる。時には近くの公園や動物  
園へ連れていってもらって大喜びのこともある。

その日は決まって夕食まで付き合うことになり、  
直哉が幼稚園で習った歌や踊りを披露して、いっ

も静かな板垣家に賑やかな笑い声が響くのであ  
る。

八月二日、梅雨が終わって真夏がいきなり

飛び込んできたような暑い一日だった。

「栄子さん、今日は奥の部屋にいつてちようだい。

直哉君は伯母さんといっしょに遊びましようね」

芙美のようすがいつもと違った。

「伯父さん、どうかなさったのですか」

家の中のようすを伺いながら、栄子は心配にな  
って聞いた。

「一週間前に庭いじりをしていて転んだんです  
よ。それ以来、腰が痛いのが痛いのって起きて

こないの。お医者さんはどこも悪くないっておっ  
しやるのに」

「そうなんですか。ご心配ですね」

直哉を芙美に頼んで、源造を見舞うことにした。

(以上11月18日放送分)